

# 足立区

音まち千住の縁 × 東京アートポイント計画



東京文化発信  
プロジェクト

1:10,000

0 50 100 200 300 400 500m



2012.5.20  
(千住地区散歩ルート)

絵馬屋  
(縁)

土手(荒川)

長円寺  
(縁馬)

音

ま

ち

千

住

の

縁

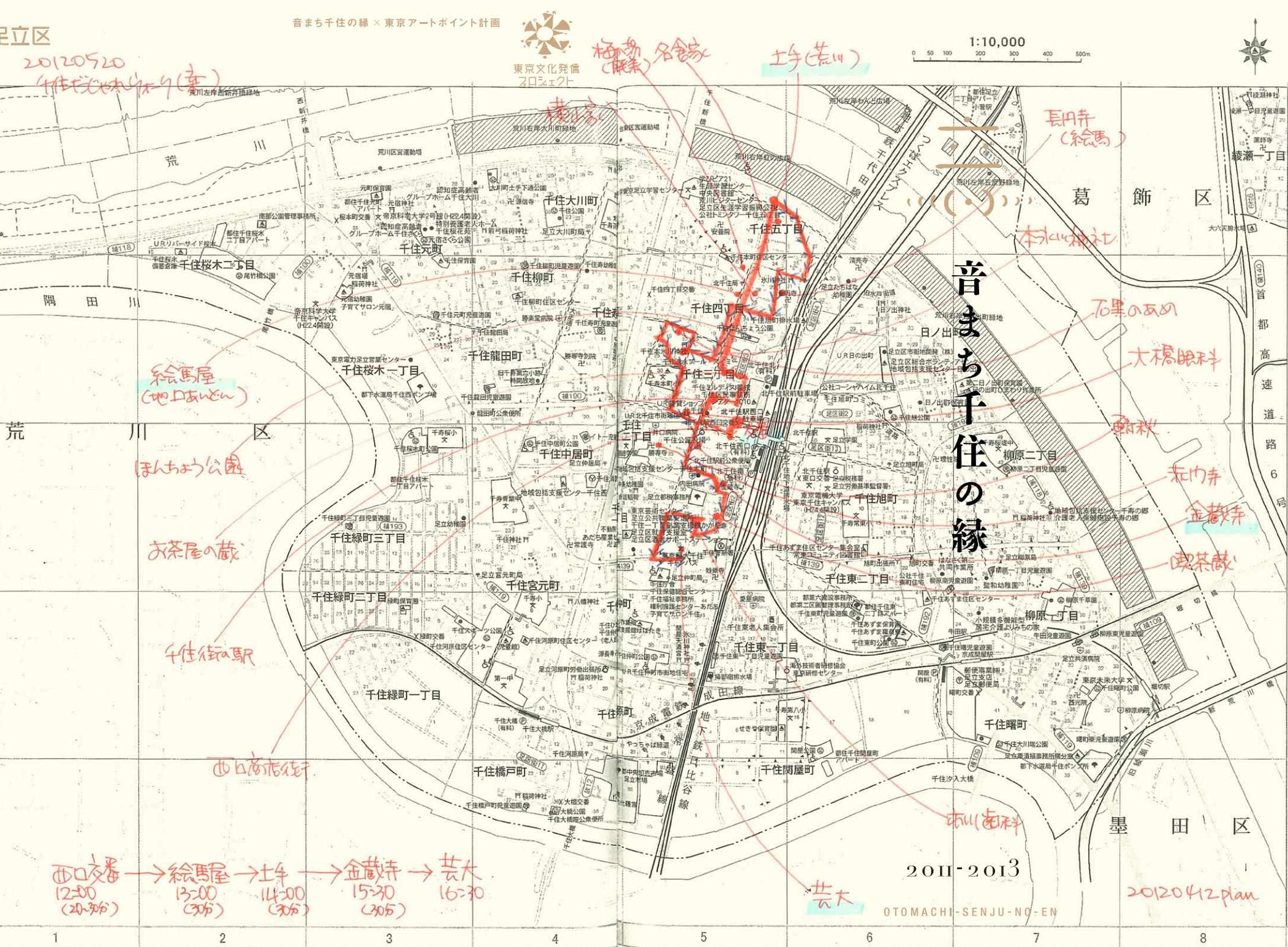
本門寺社

石里の坂の  
大橋眼科

西秋

赤丸寺  
金蔵寺

西禁蔵



2011-2013

OTOMACHI-SENJU-NO-EN

2012.4.12 plan

音  
まち  
千住の縁  
…(・)…

音  
まち  
千住の縁

2011-2013

OTOMACHI-SENJU-NO-EN

- 03 [Message] まちを動かす力を秘める「音まち」 | 舟橋左斗子
- 04 まちが音楽になる日 | 白坂ゆり
- 06 「街」で「音」が広まっていく／「音」が「街」を形成していく、その可能性 | 畠中実
- 08 [Director's Message] 縁もゆかりも | 清宮陵一

- 10 大友良英 + チーム・アンサンブルズ | 千住フライングオーケストラ
- 14 大巻伸嗣 | Memorial Rebirth 千住
- 18 野村誠 | 千住だじやれ音楽祭
- 22 足立智美 | ぬお／ジョン・ケージ「ミュージサーカス」
- 26 スブツニ子！ | ADACHI HIPHOP PROJECT
- 29 ASA-CHANG | 音まち子どもバラダイスオーケストラ
- 30 大巻伸嗣 | イドラ
- 32 やくしまるえつこ | 放送・時報／奉納朗読会
- 34 八木良太 | (Another) Furniture Music ——(別の) 家具の音楽
- 36 岩井成昭 | イミグレーション・ミュージアム・東京 —不思議な出会い—
- 38 未来楽器図書館
- 42 千住ミュージックホール
- 44 音まちトーク
- 46 [Program Officer's Message] 本書へ寄せて | 長尾聰子
- 47 [Producer's Message] ADACHIへの想いを託して | 熊倉純子
- 48 アーティスト・プロフィール

\* すごく「音まち千住農園」

「ヤッチャイ隊」に聞く／主催事業の開催概要&プロジェクト運営メンバー

「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」とは



「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」(通称「音まち」)は、平成24年度の足立区制80周年記念事業をきっかけとして、足立区にアートを用いた新たなコミュニケーション(縁)のつながりを生み出すため、東京都・東京文化発信プロジェクト室・東京藝術大学音楽学部・NPO法人によるネ・足立区の連携のもと展開している、市民参加型の“まちなかアートプロジェクト”です。本プロジェクトは平成23年9月より本格的に活動を開始しました。足立区千住地域を舞台に、大友良英、大巻伸嗣、野村誠ら各地でアートプロジェクトの経験をもつアーティストが中心となって、まちなかの担い手とともに“音”をテーマとしたプログラムを展開しています。

## Message

### まちを動かす力を秘める「音まち」

「人」だと思う。一番大事なのは「人」。まちは人で構成されるものだから。

昨年、「音まち千住の縁(音まち)」のサポーター「ヤッチャイ隊」の話を聞いた。一人ひとりのこれまでの人生と現在の「音まち」への思いを聞いてしみじみ感動したのだけれど、その中に「千住に、自分の店を持ちたいと思い始めている」と話した人があった。音をテーマにしたちょっととんがったプロジェクト。魅力を感じてそこに集まってきた個性的でしかも能力ある人たちが、「音まち」はもちろんだけど、千住のまちにも興味を持ち、千住を好きになり、千住をベースに動き始めている……。「音まち」に関わる人たちと話をすると、わくわくする。

足立区がシティプロモーション課を創設したのが2010年。「とにかく何かやらなきゃ」と千住のまちに飛び出し、「まちなかアートプロジェクト」なんて新分野に乗り出せたのは、現在共催として名を連ねる、東京藝術大学音楽学部千住キャンパスの熊倉研究室と東京文化発信プロジェクト室「東京アートポイント計画」のノウハウ、そして熱いハートがあったからこそだ。

しかし、実際に動き始めてみると、行政が経験したことのないことばかり。深夜に至る会議の数々、まちの方から叱られた数々、アーティストとのトラブル、チラシやのぼりの考え方方が180度違って何度も大喧嘩したこと……。たった3年の間にいろいろなことがあったけれど、身を粉に動き回ってくれた事務局、NPO法人やるネの面々のがんばりのもと、今、少しずつ千住のまちが動き始めているのを感じる。「千住は、藝大があって、ちょっとオモシロイコトやってるまち」。そんな新しいイメージができつつあると思うのは、ちょっとひいき目過ぎるかしら？

そして、昨年末の忘年会には、町会やPTAの方々にも何人も参加いただき、なんと「来年は音まちをもっと盛り上げるぞ！」と自ら発言してくださった！ いろんな「縁」がつながり、老若男女、区内外から、元気と笑顔が湧き上がってくる。

世のイベントにはいろいろあるけれど、継続してまちに入り込み、こんなにじわじわと人をつなぎ、輪を広げ、まちを動かす力を秘める「音まち」は、手前味噌ながらちょっといいんじゃないかな。そう思っている。

## 白坂ゆり しらさか・ゆり [アートライター]

「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」との縁は、ウェブサイト『CINRA.NET』でのスプツニ子！と野村誠への2012年のインタビューがきっかけで始まった。千葉県松戸市出身の私には、同じ常磐線沿線の北千住には馴染みがあったが、足立区をベースとするヒップホップのラッパーたちの活動は、スプツニ子！から聞いて初めて知った。地域の潜在力を引き出した好例といえる。

野村の取材は、「音う風屋」で行った。向かう途中、路地の先から摩訶不思議な音が聴こえた。「はちがブンブン はちブン音符／はちがブンブン はちブン音符／しぶしぶやるのが しぶ音符～」。野村が鍵盤ハーモニカをピカピカ演奏して、老若男女が歌っていた。「だじゃれ音楽って言うらしいよ」と立ち止まったおじさんが教えてくれた。

その日のワークショップで、複数の人のだじゃれをつないだ歌詞も妙に納得のいくストーリーに帰着し、音楽家のセオリーにない歌「おんぷ」が即興的に生まれた。もう1曲、「フェルマータ」に掛けた「笛るマータ」の骨格もこの日にできた。2013年3月の「千住だじゃれ音楽祭」

で、藝大生の丸田さんが着物を着て舞った、だじゃれの重箱。個人的には、戦後の日本に明るさをもたらしたCMの作曲者でもある、三木鶴郎の「冗談音楽」なども思い起した。

2013年11月の「千住だじゃれ音楽祭」は残念ながら見逃してしまったが、インドネシアの作曲家・即興演奏家、コメットさんならぬメットさんが参加し、ガムランや邦楽も飛び交ったという。本プロジェクトは、脱原発運動から出発した「ふだん会えない、意見を異にする人と対話する」というテーマが源にある。その通り、演奏者も観客も専門家に限らず、ジャンルも多種多様だ。実験的な音楽が、北千住から生まれ続けている。

また、2012年に足立市場で開催され、足立智美が芸術監督を務めた「ジョン・ケージ『ミュージサーカス』」も楽しかった。サンバ、声楽、ジャズ、マグロの解体ショーなど、演奏者やパフォーマーが同時に、それぞれの場所で、独立して演奏する。灰野敬二のパーカッションには圧倒されたが、読経も負けてはいない！歩き回る観客は、何をどう聴いて回るか、それぞれに固有の聴取体験を得る。

ケージのコンセプトである「自律した人々が中心を持つことなく、お互いを受け入れていく状況をつくり出す」ことを目指した場。タイムスケジュールについての指示系統に困難があったようだし、美術関係者のなかでは、とりとめない状態として厳しい評価を下す声もあった。

ただ、このプログラムを見ていて、「音まち」が目指すのは、音のイベントに留まらず、「音楽的状態」をつくり出すことにあるのだろうと思った。世代、好み、経験、技術、価値観、理想などさまざまに異なる人々が、それぞれ表現者となつて自分の音を出し、それがその時々の形をつくりながら流れ出し、その形は常に変化していく。ひいては、「まち」がそんな音楽的状態になること。北千住を構成する、再開発計画による駅の商業施設も、その裏にある飲屋街も、学園都市という最近の顔も、その一角で日常の用が足せる古くからある小さな商店街も、子どもたちが遊ぶ荒川河川敷も共存できるまち。「文化がない」と街を出て行った者も、外から新しい“音楽”を持ち帰り、“音楽”を発掘できる眼を養って戻ってくる。

2013年はタカラ湯で千住ミュージック

ホール番外編「歌声★浴場」を見た。男湯、女湯に分かれて脱衣所でライブが行われるなか、おばあさんたちは日課を崩すことなく、音楽を楽しみながら湯に浸かった。

同様に、住民に受け入れられなければ成立しないプログラムがいくつかある。「未来楽器図書館」をはじめとする展示作品がその支えになる。

ところで、全国各地で増えるアートプロジェクトを取材していて、アーティストとの協働は一つの手法にもなりつつあるが、最近では、街の人たちが主体となって表現する動きが生まれ始めているを感じる。触発された地元の人が表現しだし、質を懸念する声も聞かれる。だが、質は、トライ＆エラーを繰り返した先に生まれるものではないだろうか。エラーには転じて発見もある。

その点でも「音まち」には、住民が能動的にかかわるチャンスの場がある。NHK連続テレビ小説『ごちそうさん』の希子が、「焼き氷の歌」で人が変わったように、熱くて冷たい不思議なもの=アートには理屈や慣習を超える力がある。ただし、まちに変化が現れるまでに大概10年はかかる。区の継続的な支援を望みたい。

畠中実 はたなか・みのる

〔NTTインターミュニケーション・センター（ICC）主任学芸員〕

「音」は日常生活空間のひとつの要素として、あらゆる時間、空間と溶け合っている。たとえば、それは夕方子どもたちに帰宅時間を知らせるために毎日午後5時にどこからともなく聴こえてくる音楽だったり、夕飯の買い物客で賑わう商店街のそこそこで聴こえる商店からの呼び込みの声だったりとさまざまだ。こうした「音」の細部によって、「街」という全体がひとつの形を成している。ある「街」の情景が「音」の記憶とともに刷り込まれていることがある。「音」の記録は、ある時間、ある場所の記憶を、映像による記録よりもより鮮明に呼び起こす。「音」による記憶とは、より映像的なものもある。

それぞれの「街」が、それぞれの「音」を持っている。カナダの作曲家、マリー・シェーファーの著書『世界の調律』（原著1977年）に書かれた、音の風景＝「サウンドスケープ」は、「音」によって世界を記述し、世界を「音」からとらえようとしたものだ。それは、ある土地に本来あった音、その環境や生活に根ざした音、その場所に特有の特徴的な音の風景を参考し、それを元に失われた、失われつつある環境を再考するという、いわば「音」

によるエコロジーの提言である。そこから、その場にふさわしい、新しい音による風景をあらためてデザインするといった環境デザインの領域に、聴覚から接近して考えるサウンドスケープ・デザイン（サウンド・デザイン）の手法が生まれた。

サウンド・デザインは80年代に日本でも、一種ブームのようにもなり、公共空間における環境整備をうながしたが、しかし、それは長期的にみると成功したとは言いがたいのではないだろうか。「サウンドスケープ」では、ある環境から余計なものを排除し、必要なものを残し、あるいは追加する。そうやって、理想の音環境－るべき姿－を構成していくとする姿勢が、どこかとても人工的に、環境と乖離したかたちで作られていってしまった印象がある。付け足された音は、その場所に根付かなければ、いずれは風化してしまうだろうし、それ自身、余計なものとして排除されてしまうだろう。

現在、「街」のような、都市空間の中の単位がこのようなサウンド・デザインを試みるとするなら、その「街」の風土や生活に根ざした、それらとともにある／ありえるような「音」の活動を、もうい

ちど「街」の活動の中に組み込んでいく、いわば「音」による環境づくりということが考えられるのではないか。それは、いわゆる従来あったようなサウンド・デザインや環境音楽のようなものではない。すでにある「街」の上に外側から「音」のペールを被せてしまうようなものではなく、もっと「街」の活動の中から生まれてくる、活動によって生成される、営みとしての「音」であるはずだろう。だから、それはけして「音」そのものを「街」に実装していくことだけにとどまらない。活動体としての「街」が生み出す「音」が形成する環境ということなのではないだろうか。それは、つねにそこで起こる出来事として生じるものであるはずだ。

この「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」は、こうした観点から、「街」と「音」との関係とその可能性を考える上で、国際交流、市民参加といった地域振興のアートプロジェクトということを超えて「音による街づくり」という側面が見えてくるのではないか。たとえば、歴史的文化的な価値をみとめられた建物などは保存されていく（場合がある）よう

に、人々の生活の中に浸透した「音」による出来事とその記憶を残していく方法はあるだろうか。さらには現在の「街」の環境の中に、新たな「音」の出来事を装填し、「街」を印象づける構成要素を作り出すことは可能だろうか。それは、こうしたアートプロジェクトが避けがたく持ってしまう、実際の地域社会との違和をどのように乗り越えるかという課題と結びつくような気がする。

ささやかな「音」が、時間をかけて地域社会に浸透していくようなプロジェクトを夢想してみる。それぞれの「街」には、それぞれの「音」の風景がある、という謂いになれば、「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」におけるさまざまな営みは、時間をかけて「街」の風景になっていくかもしれない。それが、徐々にある共同体の中で育まれ、その「街」の名物になる、といったようなヴィジョン。本来「音」や「音楽」はそのようにして長い年月をへて、変化しながらも継承されていくものであるだろう。そのとき、「街」は「音」のための単なる舞台ではなく、それが育つ土地であるということになるだろう。

## 縁もゆかりも

清宮陵一 きよみや・りょういち

[「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」ディレクター]

千住にはそもそも縁があった。その昔、父方の実家がこのまちにあった。ものごころもつかない小さな頃に毎週末のように遊びに来ていたこのあたり。「音まち」に関わるようになって約30年ぶりに訪れるようになり、当時では考えられないような巨大な駅と商業施設に、賑やかないくつもの商店街に驚きながらも、一步路地を入れば懐かしい雰囲気がそこかしこに残っている。実家はとうの昔になくなってしまったが、家の近くにあった何かが見つかるかもしれない。実家の後に建てられた家を探してられるかもしれない。新たなイベント会場を探すために千住を歩く時は、いつもそのことを気にしていた。

たくさんのシャボン玉が日差しに照らされて光に満ち溢れる空間、凧が揚がるにふさわしい電線のない風の真っ直ぐ吹く広場、だじゃれを言いそうなおやじたちがわらわらと生息する呑み屋、ヒップホップというカルチャーをありのまま許容してくれる匂いのする場所……。

『しゃポンおどり』の歌詞にもある通り、荒川と隅田川に挟まれたレモンのよ

うなかたちをしているこの地域でこれまで3年間、たくさんの「場」を探してきた。場所へのこだわりは実家探しという個人的な感傷もあって、とても深く強かったように思う。

あるとき、「Memorial Rebirth 千住」を行なうにあたって開かれた地域説明会にて、こんな質問が出た。「このイベントはいったい誰のためにやるんですか?」

私は一瞬言葉に詰まった。作家がいて、演奏者がいて、パフォーマーがいて、運営スタッフがいて、お手伝いしてくれる方がいて、お客様がいて、主催者がいて。把握しきれないほどたくさんの人々が関わっていて、その誰もが楽しめる場をつくりたいし、つくらなければいけないと思ってやってきた。でもその時、とっさに口をついて出た言葉は「運営する側がみな同じ意見かはわからないが、私はこの学校に通っている子供たちにとって、一生忘れられない時間をつくりたい」だった。それが正しい答えかどうかは正直、今でもわからない。でも、この言葉を発した時こそ、大切なのは「場」ではなく「人」なんだ。どこでこのイ

ベントをやるかではなく、誰のためにこのイベントをやるのか、ということにきちんと意識を向けていかなければ改めて実感することができた瞬間だった。

それからは、ちょっと前のように実家の思い出を探すこともなくなった。なので、これで時効成立かな、と思い、あえてこれまで聞かなかったことを親に尋ねてみた。

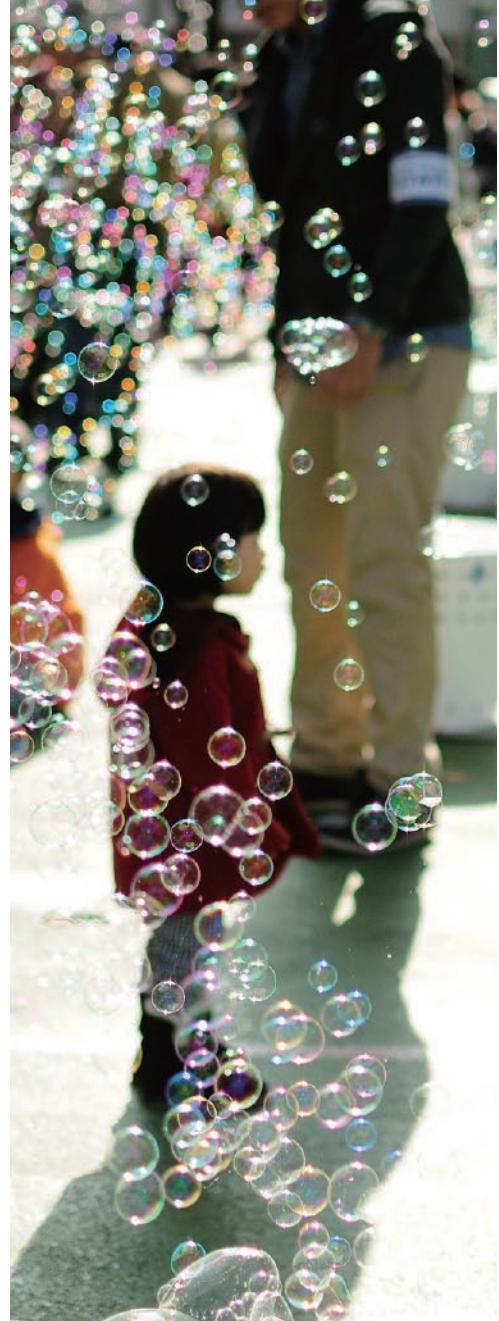
「昔、千住に実家があったじゃない？ あそこの住所って覚えてる？ 教えてくれないかな？」

「はいはい。駅からちょっと遠かった記憶があるね。えー、住所ね。あったあった。えーっと、荒川区南千住……」

「あれ、北千住じゃないの??」

「違うよ。南千住だよ」

まいった。完全に勘違いしていた。そりや、どれだけ探しても北千住で実家の面影が見つかるはずがない。と思ったのだが、まあ、いいや。「音まち」に関わることで、実は縁もゆかりもなかったこの足立区千住の人々と、一生忘れられないたくさんの縁を新たに得られたのだから。



Memorial Rebirth 2012 千住本町  
(2012年11月24日、足立区立千寿本町小学校)

# 大友良英 + チーム・アンサンブルズ

Otomo Yoshihide + Team Ensembles

## 千住フライングオーケストラ

2011-

大友良英と公募で集まったチーム・アンサンブルズが

「空から音が降ってくる演奏会」を目指すプロジェクト。

自然に左右されながらも、誰も見たことのない音楽空間づくりに挑み続ける。



凧を揚げると空の高さと青さに驚き、眩しさに目を細める。

風の強さに身を縮め、風が止まれば凧が落ちないかとハラハラする。

地上で鳴り響くチャンチキのリズム、管楽器の突き抜ける音、愉快なメロディ。

大友の指揮に合わせ大勢の演奏者が奏でる音楽に体を揺らしつつ、

上空を見上げると、凧から鈴の音色やノイズが降り注いでくる。



空飛ぶオーケストラ大実験——千住フライングオーケストラお披露目会  
(2012年3月20日、荒川河川敷 虹の広場)



「千住フライングオーケストラ」で使用している大型凧を  
上空で安定させて飛ばすには、風のタイミングを掴むことが必要だ。  
強く吹いた瞬間、ふわりと風にのせるように手を離す

「千住フライングオーケストラ」は上空から音が降ってくる演奏会を目指し、チーム・アンサンブルズと大友良英が構想した演奏会だ。『音楽家ではない人と、演奏しないバンドを組んでみたい』という大友の呼びかけで集まったチーム・アンサンブルズの多くは、音楽の“非専門家”な人々だ。彼らと大友は、企画を0から考えるために、まちを巻き込みながら一般の方も参加できるような枠組みを丁寧に話し合いながら探っていった。

そんな中、戦前には凧が千住の名物になるほど専門店があったこと、そして今でも凧揚げ大会が行われていることを発見したメンバーがいた。昔、良い風が吹いたら河川敷に出向いて凧揚げをするこ

とは大人の嗜みだったそうだ。その発見をきっかけに、音の出る凧で演奏会を行う「千住フライングオーケストラ」という企画が生まれた。

空から音が降ってくる夢は壮大だが、実際に凧で音を出すのは本当に難しい。日本にもセミ凧や津軽凧など、うなりを用いた音の鳴る凧は伝統的に存在するが、とてつもなく強い風が吹かなければ音は出ない。「千住フライングオーケストラ」は日本の凧の会・足立支部の協力を得て、凧揚げの練習や、音の鳴る凧の開発に試行錯誤していった。

そして“非専門家”だったチーム・アンサンブルズは次第に“専門家”になっていく。軽量のウインドチャイム、音程の

変わるブザー、沢山の鈴を詰めて割る美しいくす玉……。凧に付けて揚げるこれらは、すべてチーム・アンサンブルズが考え出したものだ。軽やかに鳴る鈴の音から耳をつんざくような電子音まで、「千住フライングオーケストラ」が生まれたときには想像さえできない音の広がりが生み出されていた。

浅草での「すみだ川音楽解放区」や福島での「フェスティバル FUKUSHIMA!」、東京国立近代美術館での「one day ensembles」など、大友が出演するアートイベントに遠征する合間に、徐々に音が鳴るシステムを開発していった。“非専門家”だからこそさまざまな発想が飛び出し、次々と発展させていきながら、音と凧と空が

絡み合う美しい情景をつくり出したのだ。音の鳴る凧の演奏会はひとりではできない。風を読み、凧糸と凧を持つ相手と息を合わせ、タイミングよく手を離すと、凧はふわりと空に向かう。人が凧を見上げて感動するのは、凧に乗せた強い気持ちや振り注ぐ音と共振するからなのかもしれない。

今や空から音を出す仕掛けには、空気から音が滲むような幻惑的な雰囲気を生む音の鳴る提灯や、凧糸の振動から音を拾うものまで生まれている。「千住フライングオーケストラ」の夢は、まだ続いている。

[松浦史子]

11フィートもの大型凧には特製ウインドチャイムを。  
風の動きを音で聞かせてくれるこのウインドチャイムは、  
特別な軽い素材でできている



虹色の凧がいくつも空に飛ぶさまは、  
スカッと気持ちよく、目が眩むほど美しい。  
鐘の音は凧糸を伝ってカラカラーンと降り注いでくる

大卷伸嗣

Ohmaki Shinji

## Memorial Rebirth 千住

2011

無数のシャボン玉によって、見慣れたまちなみを光の風景へと

変貌させるアートパフォーマンス作品。

千住地域をリレーしながら、参加者の輪を広げ、さまざまな縁をつなげていく。



初めての開催は、雨の降る肌寒い3月だった。

近所に住む子供たちが色とりどりのレインコートに身を包み、会場の千住いろは通り商店街を訪れ、

雨空に透き通るシャボンに彩りを加えてくれた。

冷たい雨の中、何より集まった人々の笑顔に心が温まる、かつての賑わいの記憶が蘇るひと時。



Memorial Rebirth 千住いろは通り  
(2012年3月17日、千住いろは通り商店街)

現代美術家の大巻伸嗣による「Memorial Rebirth (メモリバ)」は、無数のシャボン玉で見慣れた景色を変貌させ、記憶を呼び起こし、新たな記憶を創り上げるアートパフォーマンス作品である。これまで国内外のさまざまな場所で展開されてきたが、大巻は千住での「メモリバ」は一度きりにはせず、地域から地域へリレーのバトンのようにつないでゆくことを願った。回を重ねるごとに、縁が結ばれていきますように——。

1年目は千住で初めての試み。右も左もわからない「音まち千住の縁(音まち)」のスタッフはいろいろ通り商店街をはじめ、多くの地域の方々に支えられながら準備を進めていった。“千住で「メモリバ」をリレーする”というイメージを抱えて臨んだ2年目、地元の人と一緒に選んだ場所は、千寿本町小学校の校庭。いろいろ通り商店街から、小学校近くの千住五町会へ、メモリバの「引き渡し式」も開催された。この年は、「シャボン玉+盆踊り=しゃボンおどり」なる新たなアイディアが登場。盆踊りの盛んな千住で、もっと参加者同士がひとつになれるようにという大巻の発案から、新しい盆踊りを制作した。振り付けは、東京藝術大の卒業生のグループ「くるくるチャーミー」と千住の日本舞踊の先生が協働で行い、シャボン玉を追いかけたりつかまえたりする振りの、世界にひとつだけの盆踊りが完成した。

千寿本町小学校の校庭には、中央に大きなクスノキが生えている。その木を開むように、会場いっぱいに広がるしゃボンおどりの輪。光を受けて色とりどりに染まるシャボン玉に包まれて、晴れやかな空に、みんなの記憶が昇っていくようだった。

2013年の第3回、回を重ねるごとに新たな挑戦を続ける「メモリバ」。今回のチャレンジは、夜の開催だった。<sup>じょうとう</sup>常東地区での開催で、千住の東側と西側がひとつになる1日を生み出す大きなチャンスにしようと、前回の踊り手の方々に加え、新たに常東地区の踊り手のみなさんにも声をかけた。

また、シャボン玉と踊る人々を照らし出すため、千住にある東京電機大学の井筒正義先生と学生たちに協力を依頼し、夜の校庭と校舎にプロジェクターで映像を投影する共同企画が実現。投影する映像は、ワークショップを開催し、公募で集まった参加者が「私の千住」をテーマに撮影した写真を使って制作した。

そして開催当日。宵闇に輝く無数のシャボン玉の中で、輪になって踊る人々。夜の校舎や校庭一面に投影される映像は、シャボン玉をさまざまな色模様に照らし出し、夜の「メモリバ」をより華やかに賑やかに彩った。

[エレナ・ブジョラ、中村久仁子]

野村誠

Nomura Makoto

## 千住だじゅれ音楽祭

2011-

だじゅれ（駄洒落）から生まれる新たな音楽「だじゅれ音楽」の可能性を探求するプロジェクト。

“駄”こそが大事なんだ！とさまざまな人を飲み込みながら、

抱腹絶倒なコンサートを展開。

たとえば、「猫が寝転ぶ」というだじゅれ。「猫」と「寝転ぶ」ことには何の関係もない。

でも、まったくつながらなかったもの同士が、音によってつながる。

これって、芸術の本質を、だじゅれ自体が体现していることにはかならないんですね。<sup>\*1</sup>

僕が勝手に「だじゅれ音楽」という名前だけを作ったんですね。

すると、この言葉、人によって多様なイメージを持つんですよ、そこが面白い。

だから、一つの意味に限定せずに、だじゅれ音楽とは何なのか僕も考えているし、

皆もそれぞれ勝手に考えてる。

「これもだじゅれ音楽かもしれないな」「そっちもあり？」

とか色々と見つけていければいいなと思っているんです。<sup>\*2</sup> —— 野村誠

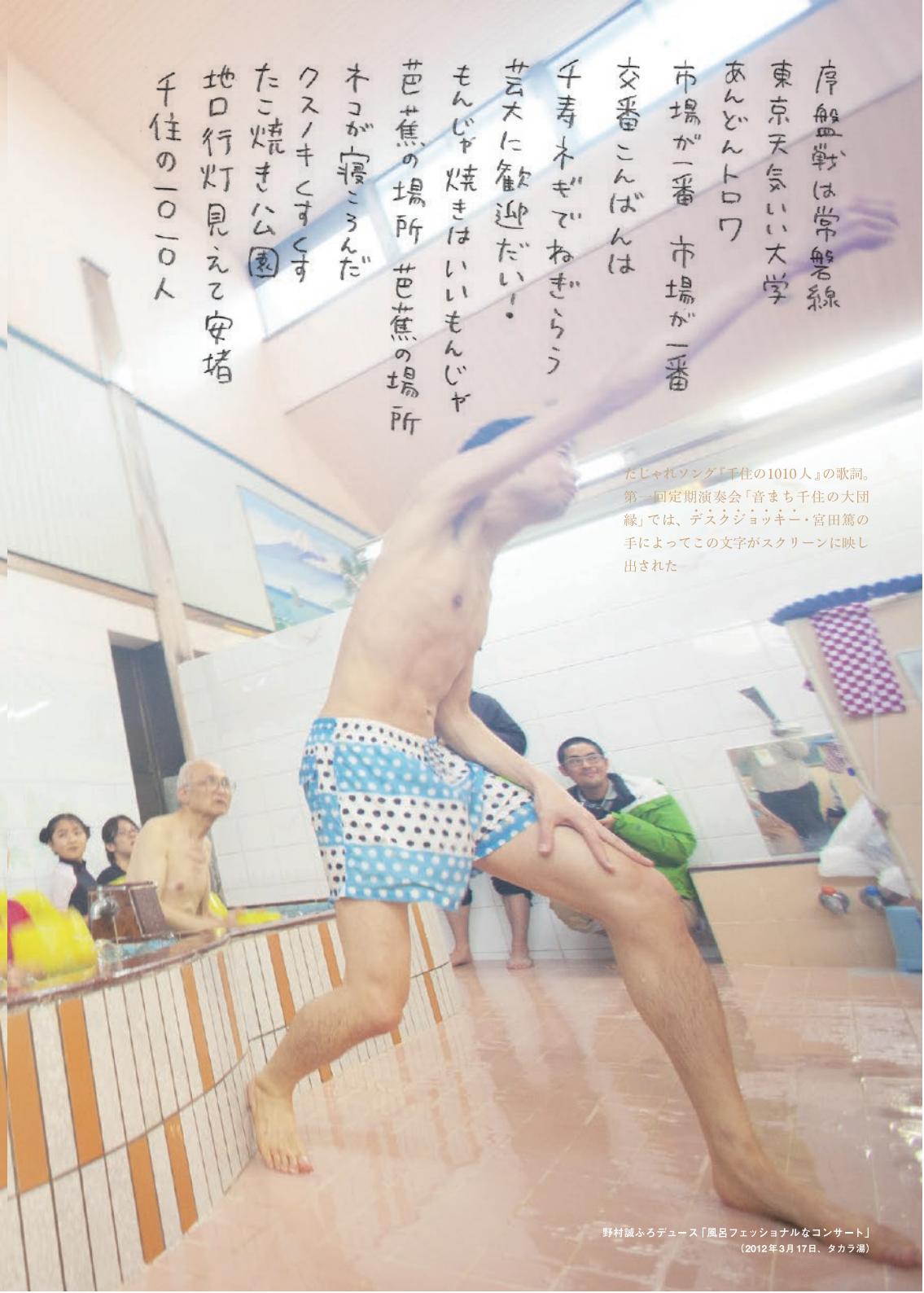
\*1 「季刊ホームシアターホワイエ」2013年(春号)掲載インタビュー記事より

\*2 白坂ゆり | 「音」は人や街を変えることができるのか?「音まち千住の縁」Vol.3  
作曲家・野村誠、日本が変わるために「だじゅれ音楽」でおじさんとコラボ  
CINRA.NET (<http://www.cinra.net/column/otomachisenju03-nomura.php>) より



序盤戦は常磐線  
東京天気いい大学  
あんどんトロワ  
市場が一番 市場が一番  
交番 こんばんは  
千寿ネギでねぎらう  
サ云大に歓迎だい！  
もんじゅ焼きはいいもんじゅ  
芭蕉の場所 芭蕉の場所  
木コガヘニうんた  
クスノキくすくす  
たこ焼き公園  
地口行灯見えて安堵  
千住の一〇一〇人

だじゅれソング『千住の1010人』の歌詞。  
第一回定期演奏会「音まち千住の大団  
縁」では、デスレジヨウギー・宮田篤の  
手によってこの文字がスクリーンに映し  
出された



野村誠ふろデュース「風呂フェッショナルなコンサート」  
(2012年3月17日、タカラ湯)



「フェルマータ」という音楽用語がある。「その音をのばす」という意味で、「停止」という意味のイタリア語からきているらしい。しかしこの言葉、よく見ると、その中にさまざまな日本語が隠されている。「笛」「増える」「待った」「舞った」……。そんなだじゃれ的発想から、どんな音楽が奏でられるのか、あれこれ試す。演奏者が「笛」を吹き、誰かが「待った」をかけたとき、一斉に「フェルマータ」。この流れを繰り返しながら、「笛」を吹く人が「増え」ていく。やがて、スタッフの「丸田」さんが登場し、「舞い(舞った)」、最後に奏者全員でフェルマータのかたちになつて礼。こうして作曲されたのが、「だ

じゃれ音楽」の代表作『笛るマータ』だ。

だじゃれ音楽は、誰かがアイディアを出せば出すほど、その意見を吸収して発展を遂げる。そして、その途中で生じる意味の飛躍は、まったく予想だにしなかった発想をもたらすことも多い。

しかし、だじゃれをはじめとした「駄」なものは、一般的には蔑まれたり、無視されたりしがちなものである。僕たちは、千住のまちなかで「だじゃれを言ってください！」と突撃インタビューを敢行したものの、苦笑いとともに「私はだじゃれなんか言わないよ」「それどころじゃない」など、だじゃれを言わない言い訳ばかりが集まってしまった。このインタ

ビュー映像は、千住だじゃれ音楽祭第一回定期演奏会「音まち千住の大団縁」で、『だじゃれは言いません』という曲になった。インタビューの中の「言い訳」の抑揚を、そのままヴァイオリンソロが美しい旋律にして映像と重奏する。「駄」などの闇を、ヴァイオリンの奏楽に昇華させたこの作品は、東京藝大の松原勝也教授の華麗な演奏に聴衆が爆笑するという、不思議な光景を生み出した。

「飛躍」と「疎外」の狭間で揺れながら、僕たちは、新しいだじゃれ音楽のかたちをつくり続けている。

[石橋鼓太郎]

はちがぶんぶん はちがぶんおんぶ はちがぶんぶん はちがぶんおんぶ  
3 ふしふしやるのがしぶおんぶ じふじふするのが  
11 ぶおんぶにぶいあなたはにぶ  
18 じふおんぶにぶいあなたはにぶ  
22 ぶんぶ いしのうえにむかわいしの  
28 まつらかつや うえにむかわいしのうえにむかわいぶ  
32 セン 2 オ K セン 3 ブ 4

だじゃれソング『おんぶ』の楽譜。2012年10月に開催された「あだちグルットウォーキング」にて、道行く人から音楽にまつわるだじゃれを集め、それをもとに野村がその場で作曲した

「千住だじゃれ音楽祭 第一回定期演奏会「音まち千住の大団縁」  
(2013年3月16日、東京藝術大学千住キャンパス 第7ホール)



ぬお  
2011

足立智美が、足立区の足立市場でのコンサートのために作曲した「ぬお」。公募で集まった約64名の器楽、合唱、チューバ隊が、「あだち」を基調とした音を奏でた。



雨上がりの雲間から光が差し込む足立市場。名物「ねぎま鍋」の香りが漂う中、10本のチューバが並ぶ。後ろからさまざまな楽器を持った人々が練り歩いてくる。悲鳴にも似た声が降ってきたと思うと、合唱隊がこちらを見下ろしている。敷地内を動き回る演奏者たちがチューバのもとに寄ってきた。拡散していく音が駐車場の屋根の下に集まり、「ラ(A)・レ(D)・ラ(A)・ド(C)・シ(H)」というひとつの塊となって飛んでいく。曲の大団円を飾った「セリ」の声の余韻に浸りながら、闇に沈む夕日を眺めた。コンサートの高揚感を象徴するかのようなオレンジ色。

仕掛けられた即興と「聴く」という行為の拡大、それが『ぬお』である。

魚市場の敷地内で増築を重ねた建物群の高低差をもとに、演奏者たちが配置された。次々と飛んでくる音の正体が見えないため、聴衆は音がする方へ足を運ぶ。あちこちで同時に演奏が繰り広げられ、音空間が拡大していくにつれて、どの場所でどんな音を聴くのか自ら選び取るのだ。聴衆が、すべての演奏者を一望できるコンサートホールとは真逆の発想が、『ぬお』という音の場だった。



## ジョン・ケージ「ミュージサーカス」

2012

実験音楽の祖、ジョン・ケージが1967年に発表して以降、世界中で行われているコンサート形式。

足立は芸術監督として前年に続いて魚市場の特殊性を活かした場をつくり上げた。



足立市場が大勢の人で溢れている。すると、突然隣の人が時計を気にしながらパフォーマンスを始めた。そのとき初めて、その人が出演者だと認識する。こちらで何か始まったと思うと、よそでも始まり、やがて終わる。同時多発的にどこかで誰かがパフォーマンスをしているが、それに規則性はないようだ。ダンスする人、読経する人、講義する人、歌う人……。ここではずっと地面に人が寝転がっている。魚市場という世界の中に、多くの事柄が各々の時間軸で生まれ、消えていく。ひとつの社会の中に生きる「私」を見た気がした。

ジョン・ケージ生誕100周年のこの年。市場の特殊空間に惚れ込んだ足立が、『ぬお』に続いて「ミュージサーカス」を題材とした。

この音空間には、「良いハーモニーになった」とか、「コラボしたことで新境地が生まれた」という達成感や歓喜は生まれない。それは演奏者にとっては苦しい状況だろう。だが、それを目撃した聴衆がふと我に返って、「そういえば世の中ってこうだよな」と受け止められたとしたら。その「気づき」と「なぜだか納得してしまう感覚」こそが「ミュージサーカス」なのかもしれない。 [宮下信子]



# 《ぬお》から《ミュージサーカス》へ

足立智美

あだち・ともみ

この原稿を頼まれたので、「音まち千住の縁」がいまどうなっているのか、インターネットで調べてみた。《ぬお》が「音まち千住の縁」最初のパフォーマンスだったわけだが、《ミュージサーカス》以降、この1年間は関わりをあまり持たなかつたし、そもそもあまり日本にいなかったので、何が起こっていたのかはほとんど知らない。写真に写っているスタッフの顔の多くは見覚えがなかったり、見知らぬ場所でさまざまなことが起こっている。私のやったことはかなり過去に押しやられているが、それは仕方ないことだろう。とはいえ、《ぬお》と《ミュージサ

ーカス》の残響がいくつかの企画から確実に感じ取ることができてうれしい。どちらの企画も足立市場という場所抜きではありえなかった。《ぬお》のようなサイト・スペシフィックな（=特定の場所のための）音楽作品というアイデアは1995年に渋谷駅東口歩道橋でおこなったパフォーマンス以来、アサヒ・エコアート・シリーズの《四万十神楽交響楽》などを通して温めていて、まさに、というタイミングでこの場所に出会うことができたことは本当に感謝したい。全体を見渡すことのできない建築構造、さまざまな残響、かすかな匂いの層が重なりあ

っていく環境はそれ以上ないものだった。《ミュージサーカス》は本来どんな場所でもなりたつ考え方ただけれども、ある程度以上の規模でやろうとしたら都内ではそれほど可能な場所は多くない。やっぱり足立市場での《ミュージサーカス》は他ではありえないユニークなものだった。

あの場所が「市場」であることはシンボリックな意味以上のことがあると思う。さまざまな背景を持つ人達が一時的に集まり、アイデアを交換してまた散っていく。私の知らない所で想像しなかった形で何かが生まれると期待する。何度も言ったことだけれども、芸術に世の中

に対する即効性を期待してはいけない。1年や2年の尺度で芸術を考えてはいけない。芸術なんてささやかなものだけれど、ささやかなものの中に未知の世界があると信じられることはいつだって大事なのだ。そんな意味でも多面的な記録が残ることは重要だ。あの体験はあの場所、その時だけのものだけど、やったことは多分に誤解を含んで伝わっていく。そして誤解が次の創造を産み出すのだ。たとえそれを創造と呼ばなくとも、芸術でなくてもいい。生活の中に何かがゆっくりと浸透していく。そういうものだと思う。



東京都中央卸売市場 足立市場



スプツニ子！

Sputniko!

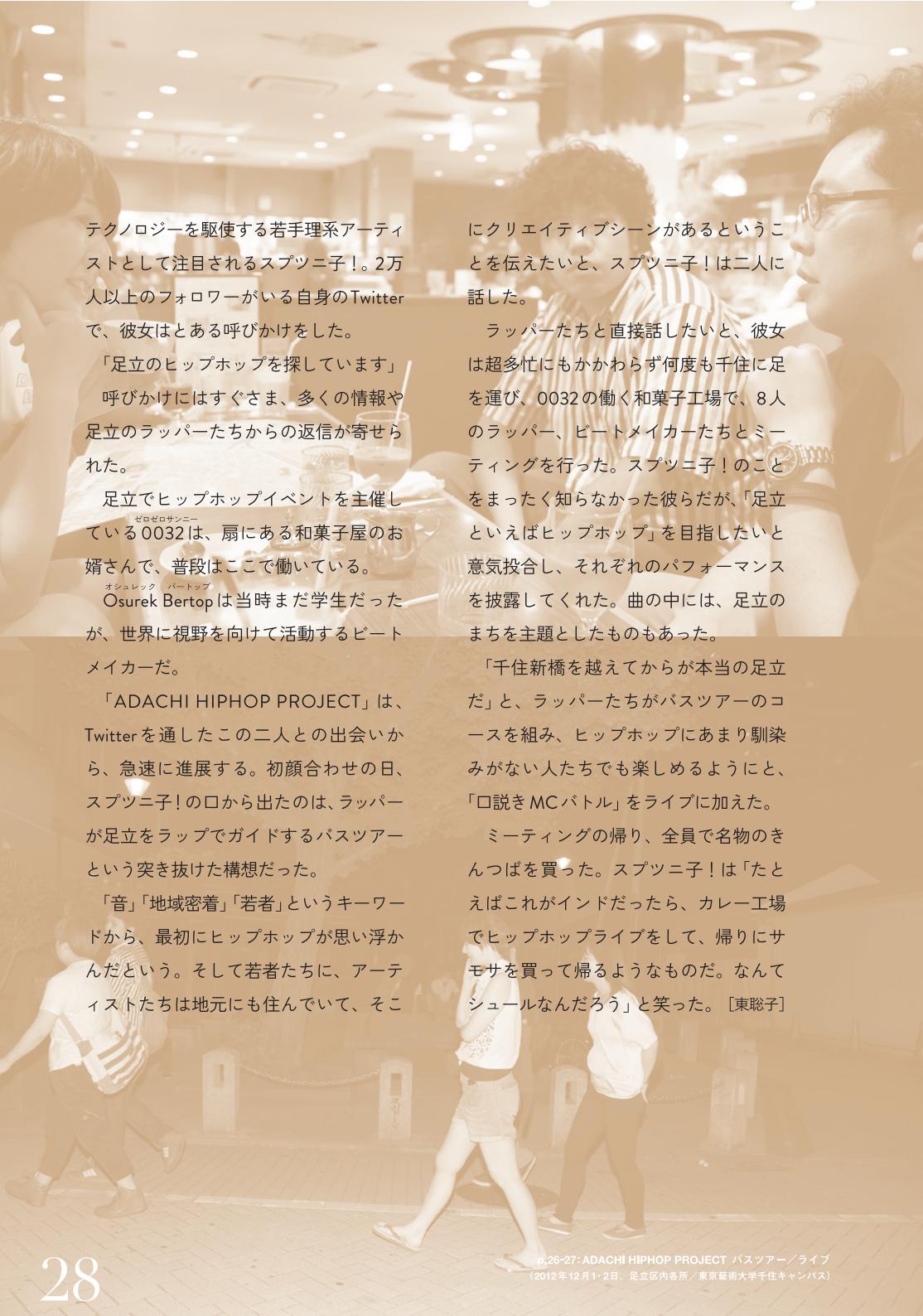
ADACHI HIPHOP PROJECT

2012 -

「『アート』はまちの中に既にある！」と、現代アーティスト・スプツニ子！が  
足立のローカルヒップホップカルチャーに着目したプロジェクト。  
地元ラッパーがガイドするバスツアーとライブを開催した。

BUS TOUR





テクノロジーを駆使する若手理系アーティストとして注目されるスプツニ子！。2万人以上のフォロワーがいる自身のTwitterで、彼女はとある呼びかけをした。

「足立のヒップホップを探しています」呼びかけにはすぐさま、多くの情報や足立のラッパーたちからの返信が寄せられた。

足立てヒップホップイベントを主催している0032は、扇にある和菓子屋のお嬢さんで、普段はここで働いている。

オショレック バートップ  
Osurek Bertopは当時まだ学生だったが、世界に視野を向けて活動するビートメイカーだ。

「ADACHI HIPHOP PROJECT」は、Twitterを通じたこの二人との出会いから、急速に進展する。初顔合わせの日、スプツニ子！の口から出たのは、ラッパーが足立をラップでガイドするバスツアーという突き抜けた構想だった。

「音」「地域密着」「若者」というキーワードから、最初にヒップホップが思い浮かんだという。そして若者たちに、アーティストたちは地元にも住んでいて、そこ

にクリエイティブシーンがあるということを伝えたいと、スプツニ子！は二人に話した。

ラッパーたちと直接話したいと、彼女は超多忙にもかかわらず何度も千住に足を運び、0032の働く和菓子工場で、8人のラッパー、ビートメイカーたちとミーティングを行った。スプツニ子！のことをまったく知らなかった彼らだが、「足立といえばヒップホップ」を目指したいと意気投合し、それぞれのパフォーマンスを披露してくれた。曲の中には、足立のまちを主題としたものもあった。

「千住新橋を越えてからが本当の足立だ」と、ラッパーたちがバスツアーのコースを組み、ヒップホップにあまり馴染みがない人たちでも楽しめるようにと、「口説きMCバトル」をライブに加えた。

ミーティングの帰り、全員で名物のきんつばを買った。スプツニ子！は「たとえばこれがインドだったら、カレー工場でヒップホップライブをして、帰りにサモサを買って帰るようなものだ。なんてシュールなんだろう」と笑った。〔東聰子〕

p.26-27: ADACHI HIPHOP PROJECT バスツアー／ライブ  
(2012年12月1・2日、足立区内各所／東京芸術大学千住キャンパス)

## ASA-CHANG

ASA-CHANG

### 音まち子どもパラダイスオーケストラ 2012

パークッシュニスト・ASA-CHANGが、地元の子どもと歌と楽器で共演。

本番までに練習を重ね、あだち区民まつり「A-Festa」のオープニングステージを飾った。



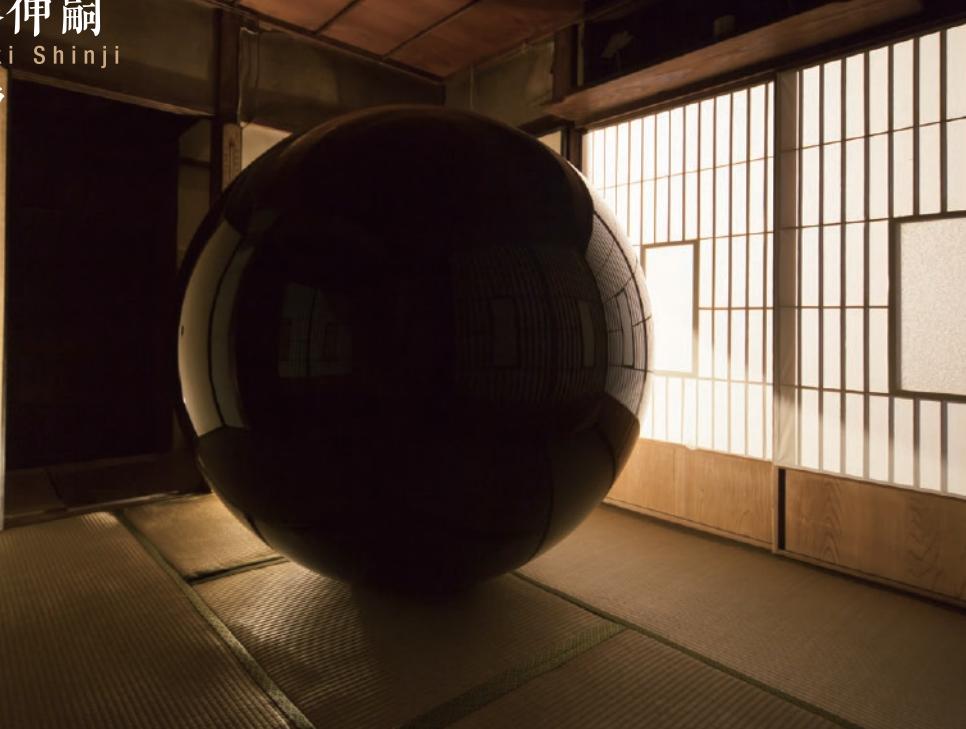
千住に住むお父さんが発したひと言が、ずっと気になっていた。

「おまえらのやっていることはよくわからん。もっと子どもたちのためになるようなことをやって欲しい。」

あだち区民まつり「A-Festa」に「音まち」も参加しては、と区から打診を受けたのは、その少し後のこと。「絶好のチャンス！」と、打楽器奏者の枠を常にみ出す音楽家・ASA-CHANGに、未就学児たちと一緒にステージに立って欲しいと打診。快諾とともに二つの提案を受けた。「教えるのではなく同じ立場で、みんな一緒にミミズ目線(！？)で臨みたい」「楽団名はASA-CHANG & 音まち子どもパラダイスオーケストラ」。そう、ASA-CHANGは、かの東京スカパラダイスオーケストラの創始者でもある（現在は脱退）。

合唱曲『虹』をベースにした歌と打楽器のパフォーマンス。ど真ん中で「グワッシャ～～ン」とシンバルで指揮するASA-CHANG、その周りを精銳コンガっ子隊、さらにその周りを鈴やタンバリンをシャンシャン鳴らす部隊が、歌いながらみんなで大行進。子どもたちの真っ直ぐなパワーをファンファーレに、音まちメイン会期が幕を開けた。

〔清宮陵一〕



光と影が交錯するインсталレーション作品。

古民家の窓ガラスから差し込む光、影の中に潜む黒い水と球体は、

鑑賞者のイドラ（先入観）に何を訴えかけたか。

ギシ、ギシ、と薄暗い階段を手探りで上っていく。指先には冷たくなめらかな壁の感触、足の裏には築70年といわれるこの家の、どこか懐かしい木の柔らかさを感じながら、仄かな明かりを目指す。そこで目にするのは一面の闇と、光の空間。

巨大な黒い球体が暗闇から迫る階下から一転して、2階には黒い水面が光を映して静かに広がっている。闇の淵に座り、巨大な水面にそっと触れてみる。わずかなさざ波から突如、光と闇が揺れ動き、みるみるうちにこの部屋の境界を歪

めていく。次々と生まれる波紋を映す壁面に光と闇が交ざり、融け合う。そしてまたゆっくりと黒い水面が張り詰める。微かな水音、時折、路地を歩く靴音。耳をすませば、遠くに聞こえるまちの喧騒。ふと、ここが民家の2階だというこ

とを思い出す。

千住の商店街のひとつ、本町センター商店街はいつも賑わっている。そこから小さな路地に入ると、古い家屋が立ち並ぶ静かな一角が現れる。そんな場所に「イドラノヤカタ」は存在した。この家は



イドラ（2012年10月27日—12月2日、イドラノヤカタ）

人、触れた人に問い合わせた。

制作、展示には地元の町長や前年度「Memorial Rebirth 千住いろは通り」を開催したいろは通り商店街の方、長年このまちでお店を営む人々、暮らしてきた人々の協力や支えがあった。彼らに誘われて、観客は数人ずつ会場に導かれ、音まちで唯一の無音の作品の中に座し、思い思いに水面を揺らがせて、それぞれの時の流れに身を委ねた。　〔佐々木愛理〕

長い間、空き家となっていたようで、あちこち綻び、壁や畳は荒んでいた。ボランティアチーム、ヤッチャイ隊、東京電機大学の学生たちの協力で、破れた障子の張り替え、畳の雑巾掛け、神棚の掃除……。埃まみれになりながらも、この家屋にもう一度、光がよみがえった。

「イドラ（idola）」とは哲学者フランシス・ペークン（1561–1626）が唱えた、人間が陥りやすい「偏見」や「先入観」の意味を表す言葉である。千住に現れた「イドラ」はこの言葉を可視化し、見た

# やくしまるえつこ

Yakushimaru Etsuko

## 放送・時報／奉納朗読会

2012

花火放送、夕焼け放送、商店街放送、駅前ビジョン。

さまざまな日常の放送が、ある日突然やくしまるえつこの声に。

ヤッチャ場の歴史をもとに、やくしまるが新たな物語を紡いだ奉納朗読会も開催。



かつて都内最大級を誇った青物市場「ヤッチャ場」の鎮守・千住河原町稻荷神社境内の神楽殿にて、  
ヤッチャ場の歴史をもとにやくしまるが新たに紡いだ物語を即興で演奏、朗読した。

やくしまるえつこ「奉納朗読会」

(2012年11月25日、千住河原町稻荷神社、出演=やくしまるえつこ、大友良英、和田永 [Open Reel Ensemble]、山口元輝)

「ただいま、14時になりました。江戸から北への玄関口、宿場町通り・北千住サンロード商店街。長い歴史を持つこの商店街では、毎年街道祭りが開催されています。足立のまち情報スポット、「千住街の駅」にもぜひ立ち寄ってみてくださいね。いつも賑やか、宿場町通り・北千住サンロード商店街時報放送を、「音まち千住の縁」やくしまるえつこがお届けしました。あわてないあわてない、ひとやすみひとやすみ。」

定刻になると、5つの商店街へのヒアリングのもと集められた情報から、彼女が感じた各商店街のイメージや特徴が語られたアナウンスが流れた。

朗読も手がける音楽家・やくしまるの声の演出は、暮らしの中にただよう音にまぎれて、区内のさまざまな放送媒体か

ら電波となって、個人個人の何気なく利用している下校の道、商店街の空気自体に溶け込んでいく。夕方、区内で下校時に流れる「下校時安全放送」のナレーションは彼女の独特な声に変化していた。

店の売り込みの声、何気ない立ち話、車の行き交う音……。音に満たされたまちが、独特な存在感を放つ、柔らかい不思議な声に包み込まれた。

歴史が残す物語にちょっとした変化を起こし、意識させることで、まちの印象の中に歴史が浮き上がる。彼女の声によって千住のまちはいつの間にかジャックされた。

[西島慧子]

Drawing: やくしまるえつこ ©Yakushimaru Etsuko



やくしまるえつこ

(Another) Furniture Music —(別の)家具の音楽  
2012

どこにでもある家具や家電そのものが、日常に溢れる音を鳴らし始めたとしたら。

『家具の音楽』(エリック・サティ作曲、1920年)を読み替え、

現代の千住の路地裏に、“別の”かたちで息づいた7品。



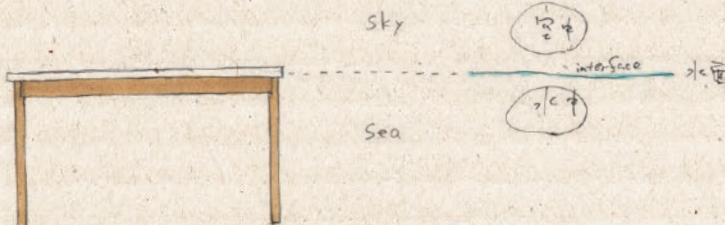
## ▲ The Forest of Senju

まちで採取した音が、引き出し一つひとつに。まちの音は、さながら木々や鳥たちのざわめきのよう

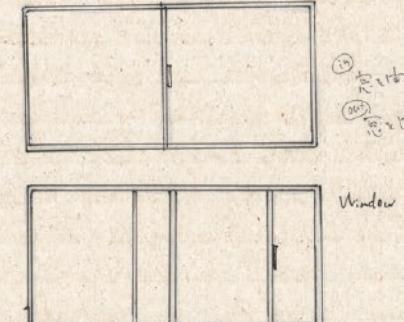


## ▼ The Sea Under The Table

空中で聴く音と、水中で聴く音の印象はまったく違う。海と空を分けるテーブルの天板の下に潜ると……

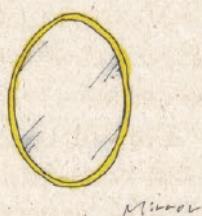


Rainy Day Music ▶  
傘の持ち手にかかるヘッドホン。目を閉じて音を聴くと、まぶたの裏に雨の風景が浮かぶ



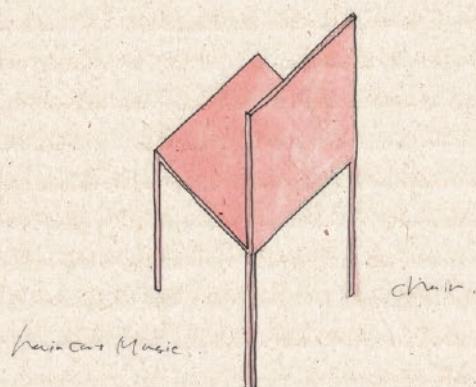
## ▲ Listen to the Window

窓を開けるとガラスに言葉が現れる。  
外の音を内へ呼び込む



## ◀ Chair and Mirror

椅子に座ってヘッドホンをつけると、散髪のハサミの音が右へ左へ。あたかも髪を切られているような気持ちに



北千住駅から徒歩10分、宿場町通り商店街の裏路地にある、没個性的な一軒家を舞台に展示は行われた。ここで中心となった作品『The Forest of Senju』は、作家・八木良太が千住のまちを歩き、まちの中に溢れるさまざまな音を録音したものである。

ポップでカラフルなチェストの中には、フィールドワークを通して集められた大踏切の音、飲み屋横丁の喧噪、公園に響く子供の声、土手に吹く風のうなり、氷川神社の木々のざわめきなどが隠されていた。その音はすべて、作家が体験した千住というまちを凝縮しているようであった。鑑賞者が思い思いにチェストの引き出しを開けると、まちのさまざまな場所で収集された音が溢れ出した。

作品に変化した家具が奏でるまちの音は、耳を傾ける鑑賞者にさまざまな想像をもたらした。その時、鑑賞者が抱いたイメージは、音から想像して変化した、まちの新たな姿だったのではないだろうか。

[西野みなみ]

日本に暮らす外国人の生活に根ざした異文化を紹介・共有するプロジェクト。

外国人の経験やエピソードから得た物語を素材に、

日本人の疑問を加えて独自の作品が生まれた。

「国の匂い」について考えたことはあるだろうか。ある韓国人留学生は日本の匂いから、宇多田ヒカルを思い浮かべるという。「イミグレーション・ミュージアム・東京（IMM）」にはその発想から発展した、匂いをモチーフにした作品がある。外国人の人々は日本のいろいろな匂いを嗅いで、何を思い浮かべるだろう。異なる文化に暮らしていたからこそ気づく小さな違和感を独自の手法で展示した。

想像もできないような文化の融合は実は常に起きていて、我々が思う日常が非日常に変わるその境目は、とても近く、手の届くところにこっそりと秘められている。そんな気づきをもとに作品をつくりあげていくのが「IMM」だ。

このプロジェクトでは日本で暮らす外国人の生活や、言葉だけでは伝えきれない想いを、現代美術の手法を用いて表現する。美術家・岩井成昭の監修のもと、外国人の日本での経験を材料にした作品制作を行うのは、アーティストに限らない、一般の人々だ。

今回参加した人々は、大学生、会社員、ダンサーなど顔ぶれもさまざまである。地域に暮らす外国人へのリサーチとミーティングを何度も行い、写真・映像などの作品が少しづつつくり上げられた。参加者が持つさまざまな経験と、外国人との交流が結びつくことによって、観る者の新しい価値観の発見へつながっていく。

例えば、外国語を日本語に聞き間違え



左 上本竜平+カタノワ カテリナ「私の〈アイ〉ランド」  
中 井出友実+鶴巻俊治+伴優香子「ブルースト現象@東京」  
右 岡野勇仁+佐藤友梨+宮本一広「スカイ・イー」

てしまったり、その逆だったりといった「空耳」の経験が誰しも一度はあるだろう。今回はそうした聞き間違いと、同じ発音でも意味の違う外国の言葉を集めた映像作品も制作された。この作品『スカイ・イー』は観ていると、思わずニコリと微笑んでしまう。

そしてウクライナの女性が日本の日常生活で感じた「違和感」を写真で表現し

た作品では、ひとりの女性の目線を通して、文化によって異なる日常の捉え方が我々の目に映る。

IMMは、文化の違いをステレオタイプに分類するのではなく、個人個人の視点から、その奥底に潜む違和感をすくい上げる。それを可視化した世界は、我々にたくさん発見をもたらしてくれる。

〔金ピンナ、藤木美沙〕

# 未来楽器図書館

Future Musical Instrument Library

2012

柳原商店街振興会  
柳原商店街振興会

私たちが活動拠点「音う風屋」にて二度に渡って開催された  
体験型&発展型展示。  
先鋭的な美術家や音楽家の作品も、地元作家や学生の作品も  
すべてが等しく混じり合い響き合う音空間を創出した。



2013年 未来楽器図書館 (2013年10月27日—12月8日、音う風屋)

これまでどんな楽器に触れてきたらうか。「音まち千住の縁」の活動拠点である「音う風屋」を会場として二度に渡って試みた「未来楽器図書館」は、ほとんどの人が触れたことのなさそうな楽器を、実際に触って演奏し、楽しめる体験型展示だ。一度目は2012年「音まち千住の縁」秋のメイン会期に、音楽家だけでなく美術家やプログラマーを含む5名の個性溢れる作品が、土間と小上がりに雑魚寝するように同居した。足立智美が1994年からつくり始め、各方面のミュージシャンに絶大な人気を博していた『TOMOMIN』から出るファミコンのような懐かしい音色に、近くの大学生は夢中になってツマミをいじった。山本俊一による『PICnrome-ETH』が生み出す複雑なプログラムのパッドのまるでお餅でできたお菓子のような動き

を、近所のチビちゃんたちが食い入りながら不思議そうに見続ける姿も微笑ましい。ゆるやかな秋の休日が続いた。

そんな中でも、小日山拓也による多種多様な『お風呂樂器』は日々独自の進化を遂げていった。半分に切った2リットルのペットボトルの口の部分に、リコーダーの吹く部品(先端の方)を逆さまにはめ、さらにその先にビニールチューブをつける。そのビニールチューブの長さによって音程が変わるというごく簡単な仕掛け。この「湯笛」と呼ばれる樂器は、元豆腐店のこの場所に残る大釜に張った水に勢いよくつけると「ピー」という澄んだ素直な音が鳴る。会期中、連日訪れる人と小日山が一緒になって好きな音程の湯笛をつくり、「どうぞ自宅のお風呂で試してみてください」と案内すると、また





たく間に大ヒット！ 当初の目論みであった体験型展示の一歩先をゆく展開が思ひがけずできていった。

翌年、二度目の未来楽器図書館のコンセプトは、この小日山の「お風呂楽器」の成功を受けて、会期中に何度も足を運びたくなるように日々変化していく場とし、そして訪れた人がコミットできるような仕掛けをつくりたいと考えた。さらには、もうすぐなくなってしまうこの建物全体が楽器になるようにしたい。3組4名の参加作家にはその2点をオーダーした。

毛利悠子は、小型のモーターが回転する装置をたくさん持ち込み、それに「ノックちゃん」という名前を付けて貸し出すことで「万物には気持ちのよい音が鳴るツボがあり、それを探ってみよう！」という提案をしてくれた。木本圭祐は、彼が

3年以上にわたって研究してきた自作の弦楽器の機構を、50年後の千住と重ね合わせることで、自分の楽器にも未来の千住にも、新たな可能性が共鳴し合うような仕組みを、「音う風屋」の2階の6畳2間で2カ月以上をかけてつくってくれた。さらに、昨年に続いて参加している小日山拓也は盟友・江川次彦を招き入れ、どこにでもある「紙」のみを使って楽器の可能性を探ってくれた。それぞれの設置場所はすぐに決まったが、音には当然境界がない。互いの音が浸食し合うこの巨大な楽器と化した家の中で、さらに音を重ね合わせる演奏会を毎週行っていくことが千住ヤッチャイ大学の提案により決まった。

週替わりのコンダクターが独自のルールを設定し、この場所と共に存する。演奏に参加する者は自分の楽器を持ち込んで



も良いし、ここにある展示作品を奏でても良い。そもそも、その場にたまたま居合わせてしまった人も演奏者として参加できる入り自由な演奏会。私は、江川が会期中日々の変化の中で出した紙くずを漁り集め、パンチ穴でつくった小さな丸をお米のように研いだり、筒状の紙をタコウインナーのように切る行為にリズムをつけることで演奏会に参加した。

「未来楽器図書館」を訪れ、「未来楽器演奏会」に参加し、自宅へ帰れば、昔触れていた楽器を押し入れの奥から探し出すまでもなく、手近にあるどんなものも楽器に思えてくるだろう。

そう、「未来」は一握りのアーティストが提示してつくり出すものではなく、常に自分の中の閃きの続きをあるのだ。

[清宮陵一]

**1 EY3『BONPUCASTRING』(2009)**  
カラフルにペイントされた自動車のボンネットが、天井からのワイヤーを叩くことでギターのボディのように共鳴する。

**2 山本俊一『PICnome - ETH』(2012)**  
生命の誕生、進化、淘汰のプロセスを再現した「ライフゲーム」プログラムをパッドにインストール。

**3 江川次彦+小日山拓也『PAPIER MUSIK』(2013)**  
「紙だけどれだけ楽器をつくることが可能か」という問いに、盟友二人がそれぞれ挑む。

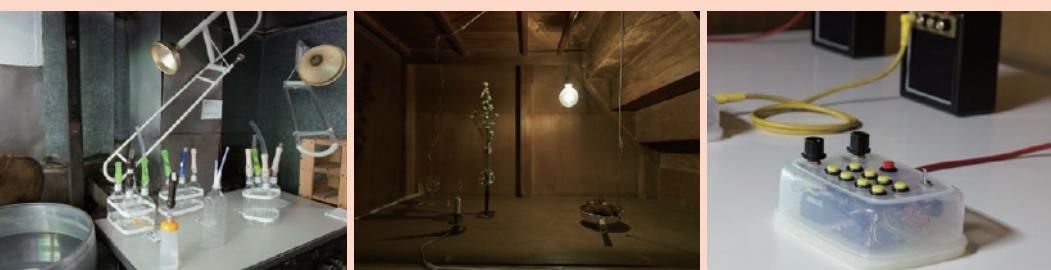
**4 小日山拓也『お風呂楽器』(2012)**  
野村誠ふろデュース「風呂フェッショナルなコンサート」(2012年3月)から生まれた、お風呂で鳴らせる耐水創作楽器。写真は携帯湯笛、風呂ンボーン、和湯笛。

**5 毛利悠子『small knocking』(2013)**  
たくさん小型振動モーターを中央制御装置がコントロクト。小さなかさけき音の気配。

**6 足立智美『TOMOMIN』(1994-)**  
タッパーを入った、オリジナルのミニ・シンセサイザー。「音う風屋」には新旧3点を展示。

**7 木本圭祐『Drone』『-fication』(2013)**  
電磁誘導によって無限に鳴り続けるアコースティック弦楽器。12のハーモニーが和室を包む。

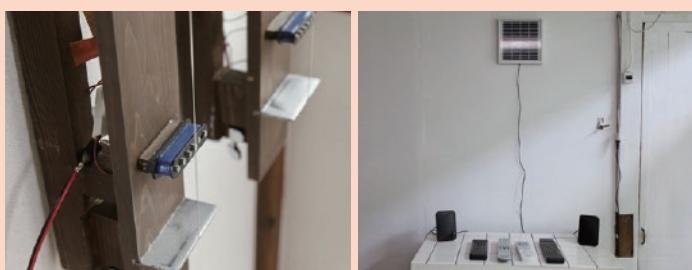
**8 八木良太『RE-MOTE CONTROL』(2010)**  
家庭用リモコンを赤外線パネルに向けてスイッチオン！リモコンはオリジナリティ溢れる音を発する。



4

5

6



7

8

2013

千住に住んでいる人も通っている人も通過している人も。

たくさんの千住っ子から親しまれているあの場所がライブ空間に突如変身。

昭和の香り漂う「千住ミュージックホール」にようこと！



第1回 Knock「純★音楽会」  
(2013年11月15日、ライブハウス「Knock」北千住)

私は千住で生まれ、千住で育ったいわゆる地元民である。誰もが生まれ育った地元を愛していると思うが、私も千住を強烈に愛している。しかしひつだけ物足りなく感じているものがあった。それは、音楽を聞くことである。千住が音楽の溢れるまちになれば、どんなにうれしいかと妄想していたところに「音まち千住の縁」を知った。社会人ボランティアとして参加した実験的コンサートや創作楽器の展示……。妄想が現実となり、みるみる夢中になっていった。そんな中、

第2回「ADACHI HIPHOP PROJECT RETURNS!」  
(2013年12月15日、野口ボクシングジム)

「音まち」で初めて開催された“普通の音楽ライブ”である「千住ミュージックホール」に参加した。  
第1回の舞台は、数多くの地元ミュージシャンを育んできたライブハウス「Knock」北千住。正直まったく想像もつかない組み合わせだったが、その中でも遠藤賢司がとにかくすごかった。ギターとハーモニカと歌のみで爆音を鳴らす。爆音なのに心地良い。あまりに心地よくて時間感覚が狂ってしまい、ふと気づいたらいつの間にか終演していた。

第3回 サンローゼ「魅惑の駅前歌謡ショー」  
(2014年2月2日、喫茶室サンローゼ)

野口ボクシングジムで開催された第2回は、ヒップホップとボクシングジムという強烈な組み合わせ。サンドバッグやミットがあれば、それでリズムを刻まない訳にはいかない。プロボクサーのミット打ちのリズムに合わせ、環ROYがラップするさまは、まるで映画のワンシーンのようだった。

そして第3回の舞台は千住が誇る東口駅前の喫茶室サンローゼだ。千住で1、2を争う「昭和なマッタリ空間」が、「深夜のワイドショー的空間」に変貌した。足

第4回 日の出町団地 8days LIVE & TALK  
「New frontiers of world's traditional music」  
(2014年2月15～23日 日の出町団地スタジオ)

立区ディープスポットトークショー→足立区発ディープ演歌→歌十タブラボンゴ+ユルフワ寸劇……。この感覚はやはり「毎度おなじみ流浪の～」で有名なバラエティ番組「タモリ倶楽部」の感じそのものだった。

仕事を終えライブに向かうとき、こんなにワクワクしながら千住に戻るのは初めてだった。そしてライブ終演後、ボーッとしつつライブについて友人と語り合ひ、我がまちを歩くのも初めてだった。

[伊原修太郎(ヤッチャイ隊)]

まちで活動する多様な立場の人々をゲストに招くトークシリーズ。

現場で生まれたさまざまな問い合わせテーマに、

参加者とともに新たな“まちづくり”について語り合った。



「音まち千住の縁（音まち）」の活動を始めてから、私たちはアーティストとともに、まちにいろいろなアプローチを試みてきた。そんな日々のプロジェクトの現場で生まれた「問い合わせ」を、ゲストとともに「音まち」に関わるみんなで学び、語り合うための場として始めたのが「音まちトーク」である。

2012年11月の「音まちトークねほりはほりスペシャル」では、日常編集家・音楽家のアサダワタルとグラフィックデザイナーの大原大次郎を招いた。全国各地でジャンル横断的な活動を展開する二人のトークは、それぞれの専門性に応じた内容の濃いものでありながら、コミュ

ニケーションのあり方に着目している点で似ていた。それは、これまでにない新しい縁をつないでいくことを目的のひとつにしている「音まち」の活動ともつながる。

中でも特に印象的だったのは、「面倒をいったん引き受ける」ことによって、その場に創造的なコミュニケーションの回路を開こうとするいくつもの実践だった。例えば、旅行では誰もがすぐに写真を撮る。後で話をするとき、言葉で説明するよりも、旅先で撮った写真や動画を見せる方がずっと情報量が多く簡単に伝えることができるからだ。しかし、旅に

「今回は撮影はNG」というたったひとつの「面倒なルール」を設けるだけで、伝えるためのたくさんの対話と表現が生まれ、コミュニケーションを誘発し、旅の質もまったく違ったものになるという。

空から音を降らすオーケストラ、だじゅられと音楽の新しい表現、地域の踊り手たちまで巻き込んだメモリアル・リバース。どれも一筋縄ではいかず、ある種の「面倒」はどの企画にもあったんだろう。そうした面倒を引き受けて、プロジェクトに関わってくれた仲間が、千住に縁もゆかりもなかった私たちをまちに引き入れてくれた。ふと気がつけば、忘年会には

60名以上の人人が参加してくれるまでになった。このプロジェクトが何をしようとしているのか、明確な画や言葉を提示することはまだできないが、関わる一人ひとりの顔が、このプロジェクトの表情をかたちづくっている。

実るものも見えるものも、関わる人それぞれに違うだろう。「音まちトーク」は、イベントが持つ熱気とは異なる、じわじわとした熱を人々に伝えていく場所。そしてそれぞれの実りを交換し合い、まだ見ぬ新しい場づくりへの種を巻き続ける場所でありたいと思う。

[神谷知里]

## Program Officer's Message

### 本書へ寄せて

本書は、「音」をテーマにしたアートプロジェクト「アートアクセスあだち 音まち 千住の縁」の2011年度から2013年度までの活動ドキュメントです。これまで取り組んできた10を超えるプログラムで何を試みたのか、アーティストと協働した運営スタッフの視点で振り返ったほか、貴重な視座からの寄稿もいただき、3年間のエッセンスが凝縮された一冊になりました。

「音まち」は、魚市場や銭湯などあらゆる場に刺激を受け、音をめぐる実践を重ねてきました。私が担当として本プロジェクトに加わった2012年は、ちょうど作曲家ジョン・ケージ生誕100年の年。日常の中の音にも耳を向け、「聴く」ことの深みを見つけた彼は、同時代の仲間とともに音楽の新たな地平を拓くきっかけをつくりました。私たちもまた、まちに内在するさまざまな「音」に出会いながら、21世紀の冒険に乗り出しているのかもしれません。

そんな手探りの試みを日々ともにし、果敢に「音まち」の運営を担うみなさまと出会えたことを嬉しく思います。主催としてタッグを組んできたNPO法人やるネの桑田智紀理事長、足立区シティプロモーション課のみなさま、日頃より本事業に理解を示してご協力いただいた東京藝術大学の植田克己音楽学部長に御礼申し上げるとともに、これまで関わってくださった多くの方々、そして千住のまちに心から感謝いたします。

無数の人とのコラボレーションによって成り立っている「音まち」を支えたみなさまにとって、本書が大きな名刺代わりとなって、新たな出会いを媒介してくれる事を願っています。

### 長尾聰子 ながお・さとこ

[東京アートポイント計画 プログラムオフィサー]

## Producer's Message

### ADACHIへの想いを託して

#### 熊倉純子 くまくら・すみこ

[「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」プロデューサー／東京藝術大学]

お世話になったみなさま、本当にありがとうございました！

みなさまに叱られながらも、少しずつまちに沁みこんでいるよう、大好きな地元ラッパー・問題児の詩に想いを託します。

「音まち千住の縁」まだまだ続きます！



確かに見た目は物騒  
でも生まれてきたこの街はhood  
root4から重なりあう318  
密集住宅街は迷路  
紙一重のheroと貧乏  
駒送りにシンクロするインスト  
五感はfiveからsixにmix  
同じ場所を歩むforce1のkicks  
時間をかけて起こすジングルズ  
スケーターはsimpleにかますkick flip  
トンネルにはタギングやスラング  
頑張り屋は集う舎人か鹿浜パンク  
影を作り出す外灯のlamp  
what's up?で始まる対等のラップ  
路地裏は暗くもてなすブランツ  
そこにはいろいろな喜怒哀楽  
生まれも育ちも我が町足立  
二足のワラジで振り落とすシガラミ  
人相わりいけど温ったけえ下町  
渡る世間は鬼ばかり

福は外鬼は内  
まだ未完成の開拓地  
脳たりんのヤンキーにジャンキー  
やけにある入り乱れた閉地  
コンビニよりありそうラブホ  
塵も積もった溢れるdust  
Pusher, bitch, ヘッズにポーポー  
活動は主に夜行動  
首都高速荒川river  
少し足運べば埼玉千葉  
週末には騒ぎ出す溜まり場  
異なったカルチャーが混じりあう  
The same routing東京メトロ  
今も変わらない西新井station  
精出すbusiness汚れるシューレス  
解決出来ない事件は終結  
生まれも育ちも我が町足立  
二足のワラジで振り落とすシガラミ  
人相わりいけど温ったけえ下町  
渡る世間は鬼ばかり

風を切り浴びる直射日光  
集団コール切る族車日影  
行くとこないしいつめ同じ  
一文無しで一網打尽  
プレスしたストレスは捨てる  
哀愁漂わす情けはflesh  
visionはざれる夕日は暮れる  
愛着わいたこの街のsmell  
生まれも育ちも我が町足立  
二足のワラジで振り落とすシガラミ  
人相わりいけど温ったけえ下町  
渡る世間は鬼ばかり

〔街並み〕  
lyric by 問題児  
[ADACHI HIPHOP PROJECT]

写真協力：遠藤一郎

## 大友良英

1959年生まれ。即興演奏家として世界各地で活動するほか、映画やテレビなど映像作品の音楽を多数手がける。近年は多種多様な人とのコラボレーションを軸に展開する音楽作品や特殊形態のコンサートを手がける。東日本大震災を受け、自らが暮らした福島にて「プロジェクトFUKUSHIMA!」を主催。

## 大卷伸嗣

1971年岐阜県生まれ、東京都在住。アーティスト。作品『ECHO』『Liminal Air』など展示空間を非日常的な世界に生まれ変わらせ、鑑賞者の身体的な感覚を呼び覚ます、ダイナミックなインスタレーション作品を発表している。東京藝術大学美術学部彫刻科准教授。

## 野村誠

作曲家、ピアニスト、鍵盤ハーモニカ奏者。主な作品に「動物との音楽」「老人ホーム・REMIX」「プールの音乐会」「野村誠×北斎」「Physical Pianist」など。NHK教育テレビ「あいのて」番組監修。著書に『音楽づくりのヒント』(音楽之友社、2010年)、共著書に『即興演奏ってどうやるの』(あおぞら音楽社、2004年)ほか。

## 足立智美

1972年生まれ。パフォーマー、作曲家。現代音楽の演奏や作曲、音響詩や即興音楽、サウンド・インスタレーションの制作、楽器の創作など幅広い領域で活動。坂田明、高橋悠治、一柳慧、五世常磐津文字兵衛、伊藤キム、猫ひろしらと共に演。テート・モダン(イギリス)、ポンピドゥー・センター(フランス)など世界各地で公演。

## スプツニ子！

1985年東京都生まれ、ボストン在住。アーティスト。テクノロジーによって変化していく人間の在り方や社会を反映させた映像、音楽、デバイス、写真、パフォーマンス作品を制作。2013年、マサチューセッツ工科大学(MIT)メディアラボ助教に就任し Design Fictions Group をスタート。

## ASA-CHANG

福島県いわき市出身。東京スカラダイスオーケストラ創始者。スカラ脱退後はドラマ&バーカッショニストとして多数の有名アーティストのレコーディング、ライブに参加。自身のユニット「ASA-CHANG&巡礼」で海外で高い評価を得るなど打楽器奏者として国内外で活躍。

## やくしまるえつこ

音楽家。「相対性理論」「やくしまるえつことd.v.d」など数多くのプロジェクトを手がけるほか、ドローイングやイラストなど絵画作品の評価も高く、楽曲提供、朗読、ナレーション、CM音楽と多岐に渡る活動を行う。縦横無尽な活躍は音楽の枠組みを更新し続け、大反響を呼んでいる。

## 八木良太

1980年愛媛県生まれ、京都府在住。アーティスト。音響作品をはじめとしたオブジェや映像、インスタレーションまで、多様な表現手法を用い、音や文字、時間を題材に制作を行う。モノの機能や属性を読み替え、再構成して関係性や価値を反転させたり、経験や記憶を新たなコンテキストで再生させる。

## 岩井成昭

美術家。イミグレーション・ミュージアム・東京主宰。1990年より国内、欧州、豪州、東南アジアの特定コミュニティの調査をもとに、映像、音響、テキストなどを複合的に使用した視覚表現を展開。近年はワークショップや、多文化研究活動を並行して実施中。秋田公立美術大学教授、東京藝術大学非常勤講師。

## アートアクセスあだち 音まち千住の縁

主催 東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財團法人東京都歴史文化財団)、東京藝術大学音楽学部、特定非営利活動法人やるネ、足立区

プロデューサー=熊倉純子[東京藝術大学音楽学部音響環境創造科]

ディレクター=清宮陵一

事務局長=神谷知里

事務局=岸本友恵、胡舟ヒロミ、佐々木愛理、椎名有紀子、處美野、

中島裕美、南雲由子、橋本英史、東聰子、西島慧子、西野みなみ、三宅博子

東京藝術大学音楽環境創造科熊倉純子研究室=長津結一郎、宮下信子、エレナ・ブジョラ、鄭タシイ、金ビンナ、丸田実季、松浦史子、等麻理子、石橋鼓太郎、中村久仁子、的場昂樹、川添咲、藤木美沙

アートディレクター=濱祐斗[YUTO HAMA DESIGN]

東京文化発信プロジェクト室=森司[東京アートポイント計画 ディレクター]、

大内伸輔、長尾聰子[東京アートポイント計画 プログラムオフィサー]

特定非営利活動法人やるネ=桑田智紀[理事長]

足立区シティプロモーション課=根岸彰雄、神保義博、細谷宏、舟橋左斗子、秋谷祐行、渡辺孝明

## アートアクセスあだち 音まち千住の縁 2011-2013 ドキュメント

発行日 平成26(2014)年3月28日

監修=熊倉純子

編集=清宮陵一、松浦史子、東聰子、宮下信子、神谷知里

編集協力=佐藤惠美、柘植馨

デザイン=濱祐斗・山口真生[YUTO HAMA DESIGN]

写真=赤羽佑樹、雨宮透貴、大塚歩、河島達太郎、高島圭史、日吉永遠、森孝介

印刷=株式会社アイワード

発行 東京文化発信プロジェクト室(公益財團法人東京都歴史文化財団)

〒130-0026 東京都墨田区両国3-19-5 シュタム両国5階

TEL: 03-5638-8800 / FAX: 03-5638-8811 / E-mail: info-ap@bh-project.jp

[www.bh-project.jp](http://www.bh-project.jp)

[本書に関するお問い合わせ先]

アートアクセスあだち 音まち千住の縁 事務局

〒120-0034 東京都足立区千住5-13-5 学びビア21 7階

TEL: 03-6806-1740 (13時—18時、火曜・木曜除く)

E-mail: [info@aaa-senju.com](mailto:info@aaa-senju.com)

<http://aaa-senju.com>

2014 ©東京文化発信プロジェクト室

All right reserved

Printed in Japan

本事業は、「東京アートポイント計画」の一環として実施されました。

「東京アートポイント計画」は、東京の様々な人・まち・活動をアートで結ぶことで、

東京の多様な魅力を地域・市民の参画により創造・発信することを目指し、

「東京文化発信プロジェクト」の一環として東京都と公益財團法人東京都歴史文化財団が展開している事業です。